

認知エンハンスメントと自己同一性

林禅之(Yoshiyuki Hayashi)

東京大学総合文化研究科／日本学術振興会特別研究員 DC2

エンハンスメントとは、ヒトの諸能力をさまざまな手段によって通常以上の水準へ高めることである。そして、たとえばボストロムとサンドバーグによる定義によれば、認知エンハンスメントは「内的／外的情報処理システムの改善(improvement)や増強(augmentation)を通じた、心の核となる能力の拡大(amplification)や拡張(extension)」として特徴づけられる(Bostrom and Sandberg 2009, p.311)。これら認知エンハンスメントは、とりわけスマートドラッグを中心として、すでに現在でも広く行われている。そのため、それを容認すべきかどうかについても議論が始まっている。

エンハンスメント反対派の論拠のひとつとして、自己同一性に関する懸念が存在する (c.f. DeGrazia 2005, 田口 2009, 植原 2008)。エンハンスメントによって以前と異なる自分になってしまうのであれば、それは到底容認できない事態である。ゆえに、エンハンスメントを行うべきではない。反対派はこのように主張するだろう。

しかしながら、そもそも自己（同一性）とは何であるのか、認知エンハンスメントによってそれは本当に脅かされるのか、脅かされるとしたらどのような形で脅かされるのか、といった諸問題について、まだまだ吟味する余地が残されているように思われる。たとえば植原は、自己が実体的であるという考えを否定し、デネットに由来する「仮構的自己観」に立脚しつつ自己同一性の問題を論じる(植原 2008)。だが、植原自身も認めるように、そもそもこのような自己観が妥当な唯一の選択肢であるのかさらに検討しなければならない。これらの問題や概念を明確にしない限り、自己同一性への懸念に関する議論はあまり生産的ではなくなる可能性がある。そこで本発表では、認知エンハンスメントの是非を問うというよりはむしろ、基本的な概念の分析を通じて、認知エンハンスメントが自己同一性に影響を与えうるのかという問題を検討する。

現在の見通しでは、ドゥグラツィアが論じたように、ほとんどのエンハンスメントはある人のナラティブ同一性には影響を与えうるが、数的同一性には影響を与えないという考えがもっともらしいように私には思われる¹(DeGrazia 2005)。私は、数的同一性の基準をドゥグラツィアやオルソンのとる生物的アプローチではなく、デイントンやアンガーに従ってある種の心的能力の連続性に求めるつもりだ。このような見解のもと、数的同一性が失われる場合とはどのような場合であるのかを、認知エンハンスメントと関連づけながら検討する。

¹ ナラティブ同一性にも質的同一性と数的同一性の区別が当てはまるため、ナラティブ同一性と数的同一性を並列させるのは用語法的に不適切かもしれない。おそらくより正確に表現するならば、ここでの対比はナラティブ数的同一性と形而上学的数的同一性とでもいうふうになるだろう。